

【用語】 祝着—満足に思うこと 肝要—非常に大切なこと

【解説】 慶長六年（一六〇一）諏訪頼水に代わって蒼海城主となった秋元長朝は、新たに総社城の築造と城下町の整備を進めるとともに、その用水確保や防火対策を目的として植野堰（天狗岩用水）の開削に着手した。利根川から取水するという難工事は慶長七年から三年間を要したが、その完成によってさらに新田開発も進められた。この植野堰の開削や新田開発で中心となった人々が牛込大膳・斎城兵庫・石原新左衛門など、戦国期からの地侍の系譜を引く有力農民たちであった。

この文書は、のち秋元氏二代目となる泰朝が新田開発に尽力のあった牛込大膳にあてた土地一〇〇石の宛行状である。牛込大膳は、利根川左岸の櫛島村（前橋市）に居住する農民であったが、上新田・下新田村周辺の開発と住民の移住などを率先して行ったことから、その褒美として与えられたものである。ほかに斎城氏は三〇石、石原氏は二〇石を与えられた。なお、秋元泰朝は寛永十年（一六三三）甲斐国谷村城（山梨県都留市）へ転封となり、ここに総社藩は廃藩となった。また安永五年（一七七六）地元農民が長朝らの功績を讃えて造立したのが「力田遺愛碑」である。